

西国第十九番 霊麿山

御本尊／千手観世音菩薩 開基／行円上人

天台宗 革堂 行願寺

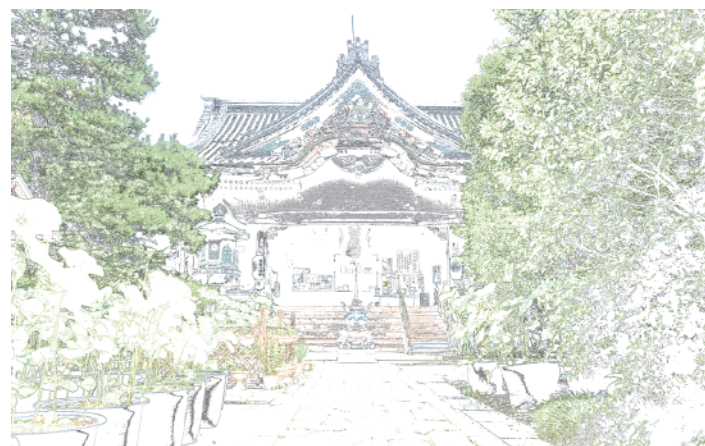
慈悲の道

山主 中島光海

『山川草木悉皆成仏』は石や草といった生命や感情を持たないものも皆すべて成仏することが出来るという考えです。この思想は日本仏教において広がります。四季の移ろいを感じながら自然と共に生きてきた日本人らしい考え方です。現代では世界中SDGS（持続可能な開発目標）が叫ばれる一方、環境破壊による異常気象や生物種の絶滅危惧など自然と共生する生き方の難しさもひしひしと感じます。

さて、革堂におきましても「源氏藤袴会」の皆様により、絶滅寸前種にリストアップされている京都府内に自生する藤袴の保全・保護活動が行われております。藤袴三則（①種から育てない②京都から出さない③他府県の藤袴を入れない）のもと一年を通して育成活動が行われております。春には新芽を挿し芽にして定植し、夏の厳しい暑さや台風を乗り越えて秋には満開を迎えます。その後、咲き終わった藤袴の花・茎・葉を全て刈り

取り、無農薬で育てられているため乾燥して匂い袋や、成分を抽出して入浴剤やアロマミストなどが作られます。残された根は冬を越し、来年の春に新芽が出る。とまた挿し芽にして次年度の活動の広がりとなります。「全て活用され捨てる場所がない、まさにSDGSの極みですよ」これが代表さんの口癖です。『万葉集』で秋の七草の一つとして詠まれた藤袴の匂い袋は平安時代の貴族の間でも好まれたようです。無駄なくあるものを最大限に楽しみ、暮らしに生かす暮らしは代々伝えられてきました。しかし便利な世の中になっていく中で私たちは利便さ・早さを追求するあまり、手間からうまれる密かな楽しみ、心のゆとりを手放してしまったのかもしれない。SDGSとはただ無駄をなくす、環境を守るだけでなく、私たちが自然と共生していた頃の心を取り戻すことが本当の意味での集大成なのかもしれません。



行円上人が行願寺（革堂）を開創され一千年余。殺生の罪を深く懺悔され射止めた鹿の衣を

纏い布教活動をされました。当時の京の町にもきつと藤袴が自生していたことでしょう。九月頃になると藤袴の花が咲き始め、十月の藤袴祭に向けて境内は藤袴が咲き誇ります。その風景は行円上人がご覧になった風景と同じかもしれません。どうぞ革堂にお参りされる際は、変わらぬ藤袴の姿を通して、時代や町中の風景は大きく変化しても変わらず伝えられてきた観音様、行円上人、人々の心に触れて下さいませ。